

卷之三

名古屋地方の時事新報賣捌所
從來名古屋地方の時事新報賣捌方は同地の石版舎に委
託し居たれども今般都合よりて之を廢し更に名古屋
榮町百四十二番戸金鯱館と特約を結び同地方の賣捌を
取扱はせ候間以後同館へ御注文相成候得ば名古屋井に
其近傍の無遮浜料にて時事新報配達可仕候又は迄石版
舎より時事新報御購讀被成下候方々は御手數あがら此
際右金鯱館へ更ニ御注文被成下候様恭願候

時事新報ハ一年三百六十五日一日モ休刊セズ其代價泥
洋料廣告料ハ左ノ如シ
一枚二錢○一箇月前金五十錢○三箇月前金一圓五十錢○六箇月前金三圓
○一箇年前金六圓
○時事新報社ヨリ直接ニ郵便ニテ送來スルモノニ限り右定價ノ外ニ一箇
月二十六錢ヲ追送料ヲ申受け

字
説
行
日
限付
六二
日以
迄上

自一 行至十 行	百十一 行至舟行	三十 一行以上
八	九	十
錢	錢	錢
六 錢五 厘	七 錢	八 錢
五 錢八 厘五 毛	六 錢	七 錢
	三 厘	二 厘
		六 錢八 厘五 毛
		五 錢
		五 厘

左の一編は福澤先生の令息一太郎氏が米國にて起草したるものなりとて彼の國ボストン府發児クリスチヤン、レジスター新聞紙に載せらるに付翻譯して社説又代ふ

は福澤先生の命懸ねらでく

日本は宗教道德として時勢の求めに投合可きものは耶教に非ざれば即ち改良をたる佛法に二者に外あらず中興に就き佛法を改良するよりも寧ろ耶蘇教に入るとの優れるは聊か余が信する所あれども此紙上には其事に論及せざる可し兎に角に日本佛法中の或る部分は餘り専近にして其文明開化の現状に伴へる智識の度に釣合一事は地獄に教はなし請ふ暫く余の経験より敍せん
はざるや甚ざ明白なり今ふの紙上よ於て余が日本の宗教道德の問題に心を置く人々の注意と惹きんとするのは地獄の繪を見るものあり其地獄より金の蓋の開くは未來に地獄と云ふものあり其地獄より金の蓋の開くは一年僅かに二度にして一月十六日ハ即ち其一なりと余は時の信仰には至て澹泊なる家に生れて成長したるものなれば佛家の繪を見るも一片好奇の念に過ぎざりしきものか更に合點すると能はず只人間の猛惡に於ける想像は無限にして涯際の知る可らざるに驚いたるのみ地獄の繪ハ斯くまで多くして極樂の繪ハ左様少ある其十の七八は子供心による非常に恐怖を感じ何故に今うの地獄の繪は荒鬼よ策たれつゝ剣の山に追上げらるゝものか數十の體ハ大釜に陥りて赤蝦の如くに付けられ再び虚言と吐かぬ爲めとて釘抜もて舌を抜かれて死しるゝものあり懷妊して死しるゝ女は血潮の池に沈没する如くに拘るゝもはあり捨ぢ廻されたる両手を柱に結らるゝ子供が鬼の鐵棒に轟されるものあり残酷の状實に見るに忍びず顧みて極樂の圖を眺むれば確無清淨静かにして有ると有らゆる像狀と鑿し極樂の景色は平々淡々蓮花の上に休ひのみ空々又空々何の樂むべくもはあれ世に享くべき繪の一つだよあるふとなし
余は十分に佛法の哲理を尊ぶものなれば尊信の餘り敢

て疑を質さんとするは他に非ず即ち地獄の説は今日西の文明に向て斯くも長足の進歩をなし居れる日本人の宗教の一部と爲すに足るや否やの問題なぞ斯る恐怖殘忍絵画は以て人間の感情を導いて最も高尚の精神を發揮するものにしてエス、ホーモの筆者は此情感と鍊くするものにして然るべし公言す。此優き情感の修養と發達とに由らざるいなし何とされば近代の教育に於ても人の徳心内輪智識精神の發達を以て其大主義なりと公言すればなり日本人民も亦社會の風潮を清め銘々の品行を修め宗教勸化の力よりて人心の至寶たる忠恕と好意の惡事を行はんとして敢て行ふ能ばざるの程度に至るまで教育を施らざる可らず果して然らば嚴罰を以て嚇すは無用の沙汰にして唯忠恕と好意とを養成すれば必ず人間世界に嚴罰の用を見ざるに至るべし假令へ嚴罰を以て嚇そが爲めに斯る恐ろしき繪を書き以て人心と假りにも恐怖を以て迫る可らざるあり左れば死後の苦難を示すが爲めに斯る恐ろしき繪を書き以て人心とくし其感覺を獸にするの要用あるを見ず人生の優しく情感にして一度び滅却そるとときは最早や人にして人には非ず單に生れたる器械たる可きのみ。彼の有害なる地獄の繪は心なき佛者の方便として捏造したものにあらずや日本人民は之れに致されて淺らずも恐怖の底に沈み卑俗汚劣の境遇に至りたりと呼ばれ外の國に對し他の人に向て何として面目の立つけや耻辱の大なる誇げて言ふに堪へず何物の愚か敢て然れども余の遺憾は一時にて却て可憐の思なきものに非長大息せざるはなし扱も憐れるある子供あるか此益などるや歎きとも猶ほ餘ありと云ふべし然れども彼等の方の作爲に出たるものとすれば更に惆悵に堪へざるなり然れども余の遺憾は一時にて却て可憐の思なきものに非ばなり一社會及び一個人として全世界を通玄來る同體相感の波よ駆けて自から其光明を發するまでに高貴の域に躋るを得るに至るものは天を信玄人を愛し望める道に繫ぐの致すところにして決して有形の地獄を恐るゝに由て然る可児ものには非ざるあり。

勸化^{くわいが}をることは則ち易々^{いやす}らんのみ何んど惡神^{おぞまし}を用ふ
ることをせんや」とハロルド^{ハロルド}リットン^{リットン}其^{その}小説^{小説}の上に
記しある所にして一句大^{おほ}き眞理^{眞理}と智識^{智識}とを含めり果し
て眞理^{眞理}智識^{智識}を含むるものならんよは有道の耶穌教^{キリスト教}を入
るゝとも或は今の佛法を改良^{改進}して地獄教^{地獄教}の主張^{主張}を廢す
るとも何れにても善^よく以て人民を教^{きよ}ゆるの企望^{企望}は全く
空しからざるものにして日本人民は一朝新鮮^{新鮮}ある光明
に照らされて眞實永久の進歩^{進歩}に導くべき妙力^{妙力}の下に置
かるゝより至るや決して疑ひる可らず余は決して佛法の
理に反して爭論^{争論}を試^{こころう}るものに非ず余の説は日本の佛
法を改良せんとするよりハ寧ろ日本^{日本}の耶穌教^{キリスト教}に入るゝ
に若^いうすと聊^{ひそ}か前途の見込^{見込}を立てたるまでのとよして
物の本色^{ほんじやく}に就て見れば耶穌^{キリスト}と云ひ佛陀^{釈迦牟尼}と云ひ共々信用
す可^べき歎^{たん}にして彼の地獄を以て多數の愚民^{ぐみん}と嚇すが如
き恬然^{てんぜん}嗤^{わら}づるなきの方便^{びわん}を造るべきものには非らずと
思へり故^{ゆゑ}に若し耶穌教^{キリスト教}の中に於ても地獄の教に似たる
佛^{釈迦牟尼}陀^トその宗教の名は曾て余の與り知る所に非らず唯地
獄の教^{地獄教}其^{その}ものを以て世道人心を誤ると少なからざるが
故^{ゆゑ}論議するのみ耶、佛二體^{二體}の神靈^{神靈}に向て不公平^{不公平}ある
判断^{判断}と下ださるは余の切^{きつ}く願^{ねが}ふ所なれば此文を草す
るも心中まる一片の他志^{たぢ}を留むるなしとの特^{とく}い断言^{断言}し
て自^じから欺^{あざ}かざるものなり

○ハルガリヤ國主 フヘルヤナンド公は國內北方巡廻の爲め大藏大臣及び内務大臣を率ひて四月廿七日首府ソフィイヤと出發したるに同府の兵士及び人民は熱心に見送りたりと云ふ

○故小松彰氏は逸事 東京米商會所より頭取たりしどき病死したる故小松彰氏の自傳なるものと得たれば他に聞知せし事とも參照して今茲に記載するととなしに氏の父小松維貢と云ひし人は醫を以て松本藩に仕へ夙に洋學を志し坪井信道氏の門に在り彰氏の年十九ありしどき汝も亦より洋書を習ふ可しとありしに氏は當時辭して父の言に従はず古賀詳堂鹽谷岩陰の門に歷遊し専ら漢書に心を籠えし折から長岡の人河井繩之助氏に逢ひ大に其風采議論に敬服してより無用の書を止め實際の工風に就くの必要を感ふ文久三年十二月始めて佐久間象山翁に歎を請ひ其後夕師事して蘿蔭親炙翌年即ち安政六年四月松本に歸省せしどき父に語て曰く西洋諸國に火輪船と唱ふる大ある舶船あり火力を假り蒸氣の勢を以て船に附けある二輪の車を廻はして船を行ふに進むよど一晩百里以て軍艦となし以て商船となし世界萬國を周航せり故に彼れは國富を兵強し我邦も今にして早く此の如死利器を造設せすんに他日建國の機を謀るゝ至らん之と行ふには云々之を謀るには斯々と心事を吐ひて通算あると打聞きたる父は心窃に我子の大志を抱くに驚喜したれども自ら抑へ他を宥めて曰く藩の制度は細とあく大となく慶安寛永の古格に拘るとして改正補綱を許すなどの今日に當り苟も世と競かすべき事業と企つれば寧ろ謀叛たるに名を受くるも決して忠義愛主の實を擧ぐる能ふまじ暫く時節の到るを待てと云はれて其時は其儘に止みたりと元治甲子の春氏の佐久間翁は從て京師に赴かんとするや期

改葬告白

拙寺巖元來濕地ニテ建物等朽腐致易依テ永存ノ目的無之ニ付權中協儀入上北豐岡郡日暮里村十百一番地ヘ移轉致候ニ就テハ墓碑御持主番地不明ノ諸君之レ有候ニ

日本鐵道會社本株券發行回數及株高
第一回一千株 丁五百三十號五
回一千三十六號五百圓和田同

巡査募集廣告
志願者ハ至急申出ツベシ
神奈川縣警

本月十八日
目歴史地圖
ルニ付今般
入學チ許ニ
明治廿